

令和 7 年度
福島県 大学生と集落の協働による地域活性化事業
大学生の力を活用した集落復興支援事業
石川町中谷地区業務実施報告書

獨協大学地域活性化プロジェクト石川町中谷地区チーム

指導教員 経済学部国際環境経済学科 米山 昌幸

[目次]	ページ
1. はじめに	3
2. 石川町中谷地区の概要	4
2.1. 石川町中谷地区の位置	
2.2. 石川町中谷地区の概観	
2.3. 石川町の気候	
3. 石川町中谷地区の現状	6
3.1. 石川町中谷地区の人口	
3.2. 石川町中谷地区の地域的特性	
3.3. 石川町中谷地区の暮らし	
3.4. 石川町中谷地区の産業	
3.5. 石川町中谷地区の地域資源	
3.6. 耕作放棄地と空き家	
3.7. 地域活性化支援団体	
4. 今年度の活動実績と評価	11
4.1. ミーティングの開催	
4.2. 第1回現地活動(8月)	
4.2.1. 藍の苗植え	
4.2.2. 堂平ガーデンのワークショップ	
4.2.3. 野菜の収穫とピザ作り体験交流会	
4.2.4. 一般社団法人「ひとくらす」での宿泊体験	
4.2.5. イシニクル視察	
4.2.6. 石都々古和氣神社視察	
4.3. 第2回現地活動(10月)	
4.3.1. 中谷地区総合文化祭に参加	
4.3.2. 文教福祉複合施設「モトガッコ」の訪問	
4.3.3. 一般社団法人「ひとくらす」でのお菓子作り・販売用 POP 作り、宿泊体験	
4.4. 第3回現地活動(11月)	
4.4.1. 母畑レークサイドキャンプフェス	
4.4.2. 年度検証・活動計画意見交換	
4.4.3. 藍畑視察	
4.5. 獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2025～Winter～”における福島県復興支援 物産展への参加	
4.6. 「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会	
5. 石川町中谷地区の抱える問題と課題	29
5.1. 実態調査から得られた問題点	

5.2. 取り組むべき課題	
6. 次年度の活動計画案	30
7. おわりに	30

1. はじめに

2025 年度の石川町中谷地区を担当する「地域活性化プロジェクト中谷チーム」は、笠原比佳理(代表：英語学科 4 年)、櫻井雅文(同 4 年)、三浦大(同 4 年)、太田奏海(国際関係法学科 4 年)、山下玲奈(英語学科 3 年)、小川夢叶(総合政策学科 2 年)、榎汐莉(交流文化学科 1 年)、谷津田結生(言語文化学科 1 年)、塩谷華怜(経営学科 1 年)、齋藤史空(2025 年英語学科卒)の 6 学科 10 名からなるチームである。前年度よりさらに学際的なチーム編成となり、分野横断的な知見が加わったことで、地域課題を多角的に捉える基盤が強化され、前年度の調査中心の取り組みから一歩進んだ実践的展開を志向する体制が整った。

今年度、中谷チームは地域資源を活用した体験型活動と、地域行事への参画を軸に、3 度の現地活動および学内販売等を実施した。第 1 回の現地活動は 8 月 1 日(金)・2 日(土)に実施した。1 日目は、中谷地区の藍の苗植えと、箸づくり体験を行い、地域の手仕事文化への理解を深めた。2 日目は、地域の方々とともに夏野菜の収穫を体験し、収穫した野菜を使ったピザづくりを実施した。また、石川町歴史民俗資料館イシニクルを視察し、地域の歴史的背景や文化資源の活用方法について学ぶ機会となった。

2 回目の現地活動は 10 月 25 日(土)・26 日(日)に実施した。1 日目は、中谷地区総合文化祭で販売する藍とさつまいもを使ったパンとお菓子の製作と、販促用ポップの作成を行った。使用したさつまいもは、中谷地区の耕作放棄地を活用して地域の方々が育てたものであり、6 次化の一環として、加工し商品化に取り組んだ。2 日目は文化祭に出店し、地域の方々と交流しながら商品販売を行った。

3 回目の現地活動は 11 月 8 日(土)・9 日(日)に実施した。8 日には母畑レークサイドで開催されたキャンプフェスに出店し、先月と同様、藍およびさつまいもを使った商品を販売した。前日の 7 日(金)にはメンバー 1 名が単独で現地入りし、フェスに向けた商品の製造準備を行った。9 日には福島県および石川町職員の方々と活動報告と意見交換会を行い、1・2 年目の活動成果や課題を整理するとともに、2026(令和 8)および 2027(令和 9)年度までの事業計画案を提案し、行政側からの助言をいただいた。

本報告書は、事前調査および現地調査にもとづき、中谷地区の抱える問題点を明らかにし、そこから同地区として取り組むべき課題を抽出し、メンバー間での提案と議論を重ねたうえで、今後の方向性を整理したものである。特に 2 年目となる今年度は、1 年目の調査・関係構築の成果を踏まえ、「実証段階」と位置づけられる取り組みに着手した。具体的には、地域住民との交流を通じて実行可能性の高い施策を検討し、小規模ながらも実践に近い形での試行を行うことで、次年度以降の本格的な実証実験へとつながる足がかりを築くことを重視した。

また、交流活動を通じて見えてきた地域資源の可能性や、住民ニーズの具体像についても継続的に議論を行い、「いま出来ること」と「中長期的に目指すこと」を段階的に整理した。これにより、3 年目の活動において、より実効性と持続性を備えたまちづくり実践へ発展させるための布石を打つことを目的としている。地域の方々との対話を通じて得られた学び

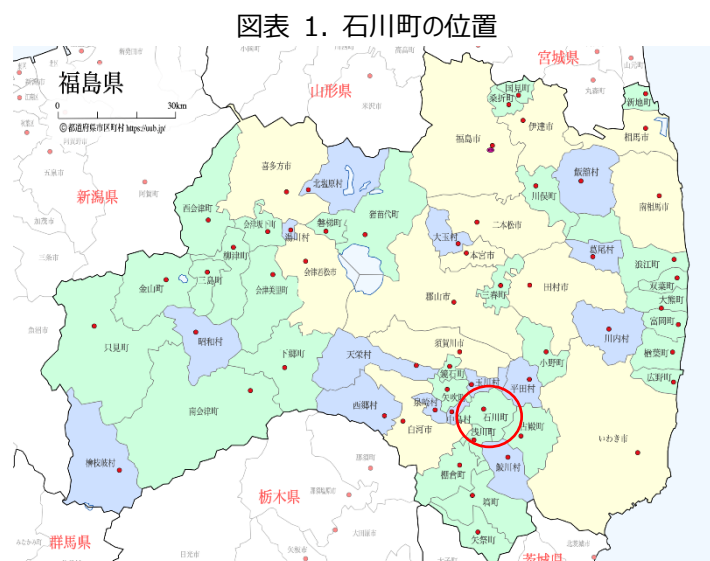
は、単なる調査成果にとどまらず、今後の実践活動の方向性を形づくる重要な基盤となっている。

本報告書の構成として、第 2、3 節では現地調査に入る前の事前調査を中心に、石川町中谷地区の概要や現状を整理した。第 4 節では現地調査の具体的内容および中谷地区の食材を活用した獨協大学での活動についてまとめている。第 5 節では中谷地区が抱える課題を整理したうえで、私たちが取り組むべき課題と解決提案を提示した。第 5 節では、2 年目の成果を踏まえた今後の展望と、3 年目の実証的取り組みに向けた議論を展開している。

2. 石川町中谷地区の概要

2.1. 石川町中谷地区の位置

福島県石川町は、福島県中通り地方に位置し(図表 1 参照)、阿武隈高地の西側に広がる自然豊かな地域である。周囲を山林に囲まれ、古くから人々の営みが積み重なってきた歴史的背景を併せ持つ点が、この地域の大きな特徴といえる。石川町の中でも中谷地区は町の東側に位置している(図表 2 参照)。



[出典]47 都道府県の地図「福島県の地図」(<https://uub.jp/map/fukushima/>)を参照。

かつては石川郡中谷村として独立した自治体であったが、その後、1955 年に石川町、沢田村、野木沢村、母畑村、山橋村との合併により、現在の石川町の行政区域が形成された経緯を持つ。こうした合併の歴史は、現在の地域構造や生活圏の広がりを理解するうえで重要な背景となっている。

図表 2. 石川町中谷地区の位置



[出典]石川町役場「石川まちナビ」(以下の URL)を参照。
(<https://navi.town.ishikawa.fukushima.jp/>)

また、石川町周辺には縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が点在しており、なかでも鳥内遺跡は全国的にも知られる存在である。これらの遺跡群は、本地域が古くから人々の生活拠点として機能してきたことを物語っている。

2.2. 石川町中谷地区の概観

福島県石川町中谷地区は町の北東部に位置し、東側は古殿町、北側は平田村に接している。地理的には複数自治体の結節点に近く、広域的な人や物の往来を支えてきた地域である。地区内には、本宮区、双里区、形見区、谷沢区、坂路区、谷区、中田区の7つの行政区が存在する。これらの集落は、それぞれ異なる地形条件や歴史的背景を持ちながら、中谷地区としての生活圏を形成している。

交通面では、主要地方道いわき・石川線が地区を東西に横断しており、いわき市と中通り地域を結ぶ重要な動脈となっている。この道路の存在は、物資輸送や通勤・通学など、地域の日常的な移動を支える基盤として機能している。

中谷地区の総面積は約 26.5km²であり、そのうち山林が 67.9%(約 18.0km²)と大部分を占めている。農地は 17.7%(約 4.7km²)で、土地利用の面から見ても中山間地域としての性格が色濃い。特に山林部は急峻な地形が多く、谷筋には急勾配の地形が連続している。一方で、中田地区周辺は比較的なだらかな起伏を持ち、典型的な里山景観が広がっている点が対照的である。

地区内を流れる今出川や飛鳥川は、古くから農業用水や生活用水として地域住民の暮らしを支えてきた重要な水系である。なかでも坂路地区は、かつて宿場町として栄えた歴史を持ち、地域の政治・経済の中心的役割を担っていた時期もあった。こうした歴史的蓄積は、現在の集落配置や地域意識にも一定の影響を与えていると考えられる。

石川町全体の総面積は 115.17km²で、阿武隈地域特有の豊かな緑と清流環境に恵まれている。町の中央を流れる今出川沿いには桜並木が整備されており、春季には地域内外から人が訪

れる桜の名所として知られている。

総じて中谷地区の地形は、急峻な山林、緩やかな里山、そしてそれらの間を縫うように流れる河川によって構成されており、多層的で変化に富んだ景観構造を有している。

交通アクセスの面では、福島空港から車で約 15 分と比較的近距離に位置している点も特徴である。また、石川町内には 95 か所のバス停が設置されており、公共交通による移動基盤も一定程度確保されている。

2.3. 石川町の気候

図表 2 に示すとおり、中谷地区の夏季(6 月～8 月)は平均気温が 19.4℃から 24.1℃と比較的高く、同時に降水量も増加する傾向が見られる。特に 7 月は降水量が 187.5mm と年間で最も多く、梅雨の影響を強く受ける時期であることが読み取れる。一方、冬季(12 月～2 月)は平均気温が 0.3℃から 2.8℃と低温で推移し、降水量は夏季に比べて少ない。日照時間は比較的安定しており、内陸型気候の特徴が表れている。春(3 月～5 月)および秋(9 月～11 月)は、気温・降水量ともに穏やかで、年間を通じても過ごしやすい気候条件が整う季節である。

中谷地区は内陸部に位置するため、季節間および昼夜間の気温差が比較的大きい点が気候上の特徴として挙げられる。ただし年間降水量は適度に確保されており、農作物の生育や里山環境の維持という観点から見ると、自然条件に恵まれた地域であると評価できる。

図表 2. 1991 年～2020 年の石川町平年値(年・月ごとの値)

	降水量 (mm)	平均気温 (℃)	日最高気 温(℃)	日最低気 温(℃)	平均風速 (m/s)	日照時間 (時間)
1 月	46.8	0.3	5.3	-3.7	1.9	163.5
2 月	37.8	1.0	6.4	-3.4	2.0	159.2
3 月	78.8	4.5	10.5	-0.6	2.0	187.3
4 月	94.5	10.2	16.8	4.2	1.8	192.7
5 月	101.1	15.6	22.2	9.8	1.5	199.0
6 月	126.2	19.4	25.2	14.9	1.2	152.8
7 月	187.5	23.2	28.7	19.2	1.0	151.2
8 月	165.6	24.1	30.0	20.1	1.0	171.2
9 月	185.3	20.0	25.6	16.0	1.0	131.2
10 月	150.3	13.9	19.6	9.5	1.2	139.4
11 月	65.4	7.9	13.9	3.1	1.5	146.3
12 月	42.3	2.8	8.2	-1.4	1.7	158.1
年	1281.5	11.9	17.7	7.3	1.5	1952.0

[出典]気象庁ホームページ「石川(福島県) 平年値(年・月ごとの値) 主要要素」(以下の URL)を参照。

https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/nml_amd_ym.php?prec_no=36&block_no=0307&year=&month=&day=&view=p1

3. 石川町中谷地区の現状

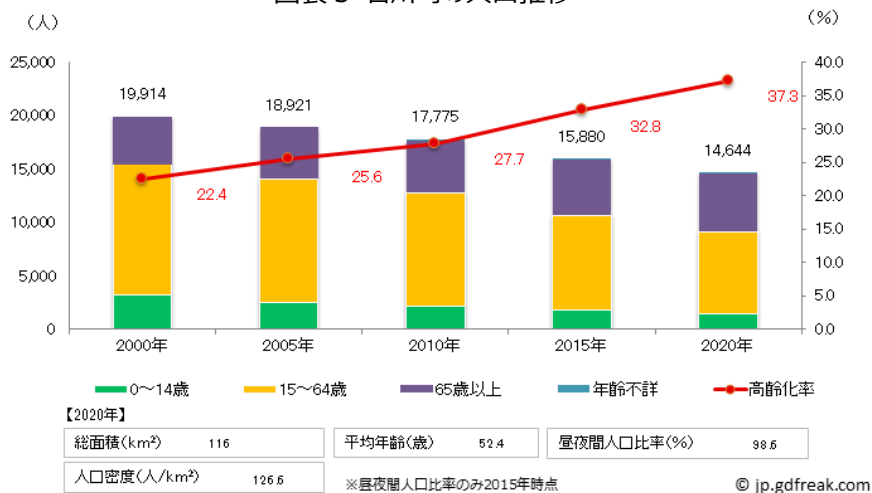
3.1. 石川町中谷地区の人口

石川町の総人口は、2000 年の 19,914 人から、2005 年に 18,921 人、2010 年に 17,775 人、2015 年に 15,880 人、2020 年には 14,644 人へと一貫して減少している。20 年間で 5,270 人減少しており、減少率は約 26.5%に達する。特に 2010 年以降は減少幅が拡大しており、人口減少の加速傾向がうかがえる。一方で高齢化率は、2000 年の 22.4%から、2005 年に 25.6%、2010 年に 27.7%、2015 年に 32.8%、2020 年には 37.3%へと上昇している。20 年間で約 15 ポイント上昇しており、人口減少と並行して急速な高齢化が進行していることが明らかである。

この推移を重ねて見ると、本地域では単なる人口減少ではなく、若年・生産年齢人口の流出と高齢人口の相対的増加が同時に進む「人口構造の縮退」が起きていると考えられる。特に 2015 年以降は高齢化率が 30%を超え、地域社会の担い手不足や医療・福祉需要の増大、地域経済の縮小など、多方面への影響が懸念される段階に入っている。

今後は人口規模の維持だけでなく、交流人口や関係人口の創出、若年層の定着促進、高齢者が地域で活動し続けられる仕組みづくりなど、人口構造の変化を前提とした持続可能な地域運営が重要になると考えられる。

図表 3 石川町の人口推移



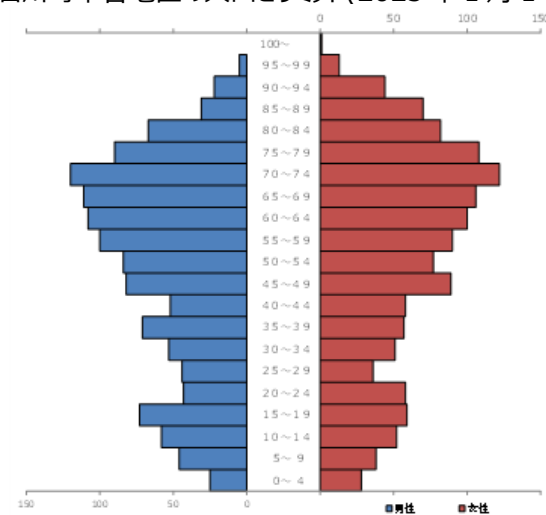
[出典]「グラフで見る！石川町の人口と世帯」(<https://jp.gdfreak.com/public/detail/jp010050000001007501/1>)(最終閲覧：2026 年 2 月 23 日)

一方、中谷地区単独の公式人口統計は公表されていないため、本研究では石川町役場より提供された「現在年齢別人口調べ(住民記録)」を基に、本宮区、双里区、形見区、谷沢区、坂路区、谷区、中田区の 7 行政区の数値を抽出し、中谷地区として再集計を行った。その結果、2025(令和 7)年 1 月 1 日時点における中谷地区の総人口(外国人を含む)は 2,625 人であり、内訳は男性 1,288 人、女性 1,337 人、総世帯数は 1,093 世帯であることが確認された。

図表 5 に示した人口ピラミッドを見ると、全体としてつば型の形状を呈しており、少子高齢化が着実に進行している様子が読み取れる。特に若年成人層の落ち込みが顕著であり、男

性では 20～29 歳、女性では 25～29 歳の人口が大きく減少している。一方で、男性は 19 歳以下、女性は 24 歳以下の層が一定数存在していることから、進学・就職・結婚といったライフイベントの段階で地区外へ転出する若者が多い可能性が示唆される。いわゆる社会減によって生産年齢人口が縮小すると、将来的な出生数のさらなる減少につながるため、中谷地区の人口構造は今後一層厳しさを増すことが懸念される。

図表 5 石川町中谷地区の人口ピラミッド(2025 年 1 月 1 日時点)



[出典]石川町企画商工課協働管財係提供「石川町のすがた(統計情報)」より筆者作成

3.2. 石川町中谷地区の地域的特性

中谷地区は、石川町北東部に位置する典型的な中山間地域であり、急峻な山林と谷筋の集落、比較的緩やかな里山地形がモザイク状に分布している点に大きな特徴がある。地区面積の大半を山林が占めており、土地利用構造から見ても林業的景観と農業的景観が混在する地域である。

地区の土地利用構成を見ると、総面積約 26.5km²のうち約 67.9%が山林であり、農地は約 17.7%を占める。この構造は典型的な中山間地域の土地利用形態と一致している。農林水産省による中山間地域政策の整理においても、山林比率の高さと農地の分散性は担い手不足と結びつきやすい要因として指摘されている¹。

集落は河川沿いや緩傾斜地に点在し、いわゆる「分散型集落構造」を形成している。この構造は自然環境との適応の結果である一方、現代的な観点では生活サービスの集約化や移動効率の面で課題を抱えやすい側面も持つ。

また、中谷地区は主要地方道いわき・石川線が東西に通過する交通軸上にあり、広域的には中通り地域と浜通り地域を結ぶ中継的位置にある。地理的ポテンシャルとしては、通

¹ 農林水産省「中山間地域等直接支払制度」(以下の URL 参照)
(https://www.maff.go.jp/j/nousin/tyusan/siharai_seido/index.html)

過交通を地域内交流や関係人口の創出にどう接続するかが、今後の地域戦略上の重要な論点となる。

自然環境の面では、里山、水系、農地、山林が近接して存在しており、生態系の多様性が維持されやすい環境条件を備えている。この多層的景観は、一次産業だけでなく、教育体験、観光、食文化発信など多面的活用の余地を持つ地域資源でもある。

3.3 石川町中谷地区の暮らし

中谷地区における生活環境は、自然環境に恵まれた落ち着いた居住環境である一方、人口減少と高齢化の進行に伴い、生活インフラの維持が中長期的な課題となっている。

教育環境については、石川町内の小中学校への通学体制が整備されているものの、児童生徒数は減少傾向にあり、学校規模の縮小や統廃合の議論と無縁ではない状況がうかがえる²。幼児教育・保育についても、町全体として子育て支援制度の整備は進められているが、利用者数の減少と広域分散居住により、送迎やアクセス面での負担が生じやすい地域構造となっている。

子育て支援施策としては、医療費助成や保育支援など基礎的制度は確保されているものの、若年世帯の定住促進という観点では、就業機会、交通利便性、日常的な買い物環境など生活全体の利便性との複合的な関係の中で評価する必要がある。

交通面では、自家用車依存度が高い典型的な中山間地域型の移動構造となっている。町内には多数のバス停が設置されているが、運行頻度や生活動線との適合性の面では、高齢者や学生にとって必ずしも十分とは言えない場面も想定される。今後、免許返納世代の増加を見据えた移動支援のあり方は、生活維持の観点から重要度を増すと考えられる。

総じて、中谷地区の暮らしは「自然環境の豊かさ」と「生活利便性の制約」が併存する中山間地域特有のバランス構造の上に成り立っている。

3.4 石川町中谷地区の産業

中谷地区の産業構造は、農業を基盤とした一次産業中心型であり、兼業農家を含む小規模経営体が地域農地の維持を担っている。作付けは水稻を中心に、季節野菜や自家消費的生産も多く見られ、いわゆる大量出荷型というよりは地域内循環型の性格が強い³。

直売所機能については、町内施設や周辺拠点を通じて農産物販売の機会は一定程度存在するものの、ブランド化や高付加価値化の余地は依然として大きいと考えられる。特に、中谷地区の里山環境や生産背景を物語として編集することで、都市部消費者への訴求力を高められる可能性がある。

商店・飲食店は、人口規模を反映して数は限られており、日常消費の多くは町中心部ま

² 「石川町過疎地域持続的発展計画 令和3年度～令和7年度」(以下の URL)を参照。
(<https://www.town.ishikawa.fukushima.jp/admin/3ced87394e2354b7e2dd7fdc623aea27.pdf>)

³ 脚注2に同じ。

たは近隣市町への移動に依存していると推察される。この構造は生活利便性の課題であると同時に、期間限定店舗、ポップアップ、関係人口向け食イベントなど、小回りの利く事業モデルが成立しやすい余白とも読み取れる。

観光資源としては、周辺地域を含め温泉施設や宿泊機能が点在しており、単独目的地型というよりは「通過＋立ち寄り＋体験」を組み合わせた周遊型観光との親和性が高い地域特性を持つ。今後は、農・食・里山体験と既存観光資源をどう編集し直すかが重要な検討課題となる。

3.5. 石川町中谷地区の地域資源

石川町には縄文時代から弥生時代にかけての遺跡群が分布しており、鳥内遺跡をはじめとする考古学的資源は、本地域の歴史的厚みを示す重要な文化資産である。これらは単なる保存対象にとどまらず、教育資源・観光資源・地域アイデンティティ形成資源としての潜在力を持つ。

また、イシニクルの職員によると、中谷地区内外には、宿場町の歴史、農村信仰、里山利用の知恵など、無形文化的要素も数多く残存しているという。これらは記録されにくい、地域の物語性を支える重要な層である。

地域資源の活用においては、単発的な観光素材として切り出すのではなく、「暮らしの延長線上にある資源」として再編集する視点が有効と考えられる。特に教育旅行、小規模体験、関係人口創出プログラムとの接続可能性は高い。地域資源は単なる保存対象ではなく、教育資源・観光資源としての活用可能性を持つ⁴。

3.6. 耕作放棄地と空き家

中谷地区においても、全国の中山間地域と同様に、担い手不足や高齢化の進行に伴う耕作放棄地の発生が確認される。農地の小規模分散性、傾斜地条件、後継者不在など複合的要因が背景にあると考えられる⁵。

耕作放棄地の増加は、景観の荒廃だけでなく、獣害リスクの上昇、農地基盤の断片化、地域営農力の低下といった連鎖的影響を引き起こす可能性がある。一方で、視点を転換すれば、小規模実験農地、体験農園、関係人口向け農的関与プログラムなど、新たな土地利用モデルを試行できる余地もある。

空き家についても、人口減少地域に共通する課題として一定数の存在が推察される。老朽化や権利関係の複雑さから即時活用が難しい物件もある一方、立地や状態によっては、短期滞在拠点、交流拠点、創作滞在など多様な再生可能性を持つ。

今後は、実数把握、所有者意向調査、試験的利活用モデルの小規模実装といった段階的

⁴ 近年の文化観光推進政策においても、地域文化財の活用が重要視されている。文化庁「文化観光」(https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/bunkakanko/index.html)を参照。

⁵ 脚注2に同じ。

アプローチが現実的と考えられる。地方自治体では空き家バンク制度が導入されているケースも多く、石川町でも制度整備状況を確認することが望ましい。

3.7. 地域活性化支援団体

中谷地区および石川町では、行政、地域住民組織、外部連携団体など複数主体が関わりながら地域維持・活性化に取り組んでいる。特に、行政主導の支援施策に加え、住民主体の活動が継続している点は、本地区の社会関係資本(ソーシャルキャピタル)の厚みを示している。

大学連携事業の受け入れ姿勢や、現地調査時の協力体制からも、外部人材との協働に対する一定の開放性が確認できた。これは関係人口創出型プロジェクトを展開するうえで、極めて重要な基盤条件である。また、大学連携事業は、総務省「地域おこし協力隊」制度⁶などとも親和性がある。中谷地区での活動は、こうした国の政策枠組みと接続可能な実践例として位置づけることができる。

今後の課題は、個別活動を点で終わらせず、地域内主体間の連携構造を可視化し、持続的に回る協働プラットフォームへどう接続していくかにある。大学側の関与としても、単年度支援にとどまらず、中期的関係構築を前提とした伴走型関与が求められる段階に入っていると考えられる。

4. 今年度の活動実績と評価

4.1. ミーティングの開催

今年度の活動の振り返りおよび次年度に向けた方向性の整理を目的として、11月20日および12月11日にミーティングを実施した。

11月20日のミーティングでは、これまで実施してきた文化祭出店やキャンプフェス出店、体験活動等の成果と課題を共有し、活動の意義と現状の整理を行った。特に、来場者の反応や地域住民との関わりの中で見えてきた可能性を再確認するとともに、運営体制や広報面における改善点について具体的な意見交換を行った。

12月11日のミーティングでは、令和8年度・9年度を見据えた活動構想の検討を中心に議論を深めた。「参加側から主催側へ」という方針の転換を確認し、フェス系イベントの企画、地域の担い手へのインタビュー活動、こども園との連携という3つの軸を今後の活動の柱として整理した。また、道の駅開設という地域環境の変化も踏まえ、実現可能性や準備期間を考慮した段階的な実施計画の必要性を共有した。

これら2度のミーティングは、単なる振り返りにとどまらず、次年度への布石を打つ重要な機会となった。活動の方向性を明確化し、役割意識を再定義することで、次年度以降の主

⁶ 総務省「地域おこし協力隊」(https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000066.html)を参照。

体的な企画運営へとつながる基盤を形成した。次年度は、今年度の成果と学びを踏まえ、より一層活動の幅を広げ、さらなる発展を目指して取り組んでいきたい。

4.2. 第1回現地活動(8月)

中谷地区チームは、8月1日(金)・2日(土)に第1回目の現地視察を4名の学生で実施した。2日間、中谷地区自治協議会事務長の志賀一隆氏に同行していただいた。2日間の現地活動の行程表は図表1の通りである。

図表 7. 第1回現地活動の行程表

時程	行程
8月1日(金)	東北新幹線 やまびこ 125号(仙台行)
08:05～08:56	大宮発～郡山着
	JR 水郡線(水戸行)
09:17～10:03	郡山発～磐城石川着
10:10～10:30	地元の皆さんによる送迎で、中谷自治センターに向かう。
11:00～	中谷自治センターにて、藍の苗植え(獨協生4名、石川町7名、藍染関係5名)・自治センター
12:00～13:00	中谷自治センターにて昼食&意見交換(獨協生4名、石川町7名、藍染関係5名)
13:30～	箸づくり体験(獨協生4名、センター2名)・中谷自治センター・ひとくらす
15:00～17:00	堂平ワークショップ(獨協生、センター2名、山橋1名)・堂平ガーデン
17:00～18:30	夕食(バーベキュー・意見交換会)
19:00	宿泊先(ひとくらす)チェックイン
8月2日(土)	
8:00～	宿泊先(ひとくらす)チェックアウト
9:00～	地元の皆さんによる送迎a朝食(中谷自治センター)
10:00～10:15	夏野菜収穫&ピザ作り体験交流会準備
11:00～13:00	中谷自治センターにて、夏野菜収穫&ピザ作り体験交流会
13:00～14:15	石川町歴史民俗資料館見学(イシニクル)の視察、またはeスポーツ体験(予定)
14:15～15:00	現地活動の振り返り
15:10～	磐城石川駅に向けて地元の皆さんによる送迎により出発
	JR 水郡線(郡山行)
15:37～16:26	磐城石川発～郡山着
	東北新幹線 やまびこ 216号(東京行)
16:38～17:51	郡山発～大宮着

4.2.1. 藍の苗植え

藍の苗植えでは、作業を円滑に進めるため、苗を分ける係、穴を掘る係、苗を植える係、水をあげる係に役割分担をして行った。藍は水を多く必要とする植物であるため、植え付け後には十分に水やりをした(写真7)。実際に苗を植えてみると、列を真っすぐに揃えて植え

ることの難しさを実感した。藍は藍染に用いられるだけでなく、食用としても利用できることを学び、藍を使ったパンやクッキーの試食を行った。試食した際には、藍特有の渋みは特に感じられなかった。また、藍には便秘解消の効果があるとされている。

写真.7 植え付けた藍



4.2.2. 堂平ガーデンのワークショップ

堂平ガーデンのワークショップでは、参加者が二つのチームに分かれてブレインストーミングを行った。話し合いには、山橋地区の交流センター長も参加し、多様な立場から意見が出された。その後、各チームで意見を整理し、まとめた内容を発表した。提案された企画には、食べ物をテーマにした祭りや、自然環境を生かしたお花見、星鑑賞、ゲームなどがあった。

ワークショップ後には土地の見学も行い、冬に雪が積もればスノーボード場として活用できる可能性があることを知った。また、きゅうりやなす、ズッキーニなどの夏野菜を使った BBQ、線香花火、マシュマロ焼きも行った(写真 8)。

写真.8 バーベキューの様子



4.2.3. 野菜の収穫とピザ作り体験交流会

野菜の収穫から調理、交流までを含むピザづくり体験にも参加した。ナス、トマト、ミニトマト、ピーマン、白ナス、きゅうり、ズッキーニなどの夏野菜を畑で収穫し(写真9)、その野菜を使って石川町周辺に住む方々と一緒にピザ作りを行った(写真10)。参加者は、くじ引きによるチーム分けで、各班およそ4人ずつ、計6班に分かれて活動した。

ピザ作りでは、生地づくりから体験した。小麦粉や強力粉、ドライイースト、塩を量って袋に入れ、粉と水を混ぜて生地をまとめた後、袋に入れて30分以上発酵させた。発酵の待ち時間には、かき氷作りも行われた。生地が発酵した後は、丸く伸ばしてトマトペーストを塗り、ミニトマト、ナス、ピーマン、玉ねぎ、チーズ、バジルなどの具材をのせ(写真11)、2つの窯を使って炭火で焼き上げた(写真12)。

写真.9 野菜収穫の様子



写真.10 ピザ作りの様子



写真.11 焼く前の状態のピザ



写真.12 完成したピザ



当日は地域の方々をはじめ、石川高校の高校生、ALTとして日本に来ていたアメリカ人、國學院大学の学生など、幅広い世代や立場の人が参加しており、調理や会話を通して自然な交流が生まれていた。参加費は無料で、ピザ作りを体験できるだけでなく、収穫した夏野菜を持ち帰ることもできる、地域とのつながりを感じられる催しであった。

4.2.4. 一般社団法人「ひとくらす」での宿泊体験

「ひとくらす」では、施設紹介を兼ねた見学や、実際の暮らしを体感できるルームツアーのような体験ができる(写真 13、14)。見学の一環として木育プログラムも行われており、杉の木を使った箸づくりでは、のこぎりで長さを調整し、紙やすりで丁寧に表面を整え、こてで模様を入れる工程まで体験した。また、福島大学の学生とともに製作されたヒノキ風呂が設置されており、実際にその檜風呂に入浴することもできた。施設内には木炭ではなく薪を使う BBQ セットや、本物の火を使った暖炉があり、自然素材と火のある暮らしを身近に感じられるのも特徴である。宿泊利用も可能で、コスプレイヤーの撮影利用や合宿といった目的での利用実績もあり、多様な使われ方をしている。

写真.13 和室



写真.14 洋室



4.2.5. イシニクル視察

イシニクルの見学も行った(写真 15)。イシニクルは、福島県で行われている謎解きイベント「コード F」の発見報告所の 1 つになっており、その影響もあって多くの人が訪れていた。来訪者の中には県外ナンバーの車も多く見られ、コード F を目的として福島県外から足を運んでいる人が多いことが分かった。

写真.15 イシニクル施設の入り口横



4.2.6. 石都々古和氣神社視察

ピザ作り会場の片付けを終えた後、石^{いわ}都々古^{つつこ}和氣^{わき}神社の狛犬を視察した(写真 16)。この狛犬(写真 17)のレプリカ(写真 18)がイシニクルに設置されており、それとの関連も感じられる場所である。今回は時間に余裕があまりなかったため、詳しく見学することはできなかったが、私たちが訪れた際にも「コード F」の謎解きを目的として来ている人の姿が見られ、イベントが地域への来訪動機になっていることを実感した。

写真.16 岩都々古和氣神社



写真.17 狛犬



写真.18 館長から狛犬の歴史について説明を受けている様子



4.3. 第2回現地活動(10月)

中谷地区チームは、10月25日(土)・26日(日)に第2回目の現地活動を7名の学生と教員1名で実施した。また、第1回目の現地活動同様、2日間とも中谷地区自治協議会事務長の志賀一隆氏に同行していただいた。2日間の現地活動の行程表は図表2の通りである。

図表2. 第2回現地活動の行程表

時程	行程
10月25日(土)	
08:05～08:56	東北新幹線 やまびこ 125号(仙台行) 大宮発～郡山着 JR 水郡線(水戸行)
09:17～10:03	郡山発～磐城石川着
10:10～10:30	地元の皆さんによる送迎で、中谷自治センターに向かう。
11:00～	中谷地区総合文化祭に参加 サツマイモの6次化による商品開発に取り組む石川高校の生徒と交流 高校生が販売する Imo Goro Daifuku を一緒に販売
12:00～13:00	文化祭で昼食
14:15～	ひとくらすチェックイン
14:45～	文教福祉複合施設「モトガッコ」の訪問・全員で軽めのミーティング
15:45～	ひとくらすに戻り、文化祭時販売お菓子作り、販売用 POP 等作成等
10月26日(日)	
7:30～	ひとくらすで朝食
8:30～	宿泊先(ひとくらす)チェックアウト
9:00～	地元の皆さんによる送迎→朝食(中谷自治センター)
10:00～	中谷地区総合文化祭2日目に参加 ・商品開発したお菓子(さつまいも、藍を使用)の販売
14:00～	文化祭の片付け開始
14:50～	現地活動の振り返り

15:10～	磐城石川駅に向けて地元の皆さんによる送迎により出発 JR 水郡線(郡山行)
15:37～16:26	磐城石川発～郡山着 東北新幹線 やまびこ 216 号(東京行)
16:38～17:51	郡山発～大宮着

4.3.1. 中谷地区総合文化祭に参加

1 日目、2 日目と中谷自治センターで行われた中谷地区総合文化祭(写真 19)に参加した。現地活動の 1 日目は、地域で開催された防災関連イベントおよび文化祭に参加した。まず、消防車やパトカーの車内見学(写真 20)、酸素ボンベを背負う体験などを通して、日常では触れる機会の少ない防災活動を体験した。これらの活動は、防災への理解を深めるとともに、地域住民との交流を図る機会となった。

また、文化祭では受付業務を担当し、運営面から地域イベントに関わったほか、石川高校の高校生と協力して「いもごろだいふく(Imo Goro Daifuku)」の販売を行った(写真 21、22)。雨天の中での開催ではあったが、来場者は多く、スタンプラリーの景品交換、体育館内での展示見学など、イベント全体を通して地域の賑わいを感じることができた。

2 日目は、文化祭における菓子販売に参加した(写真 23)。販売した商品は、さつまいもと黒ゴマのマフィン(写真 24)、大学芋スコーン、藍フィナンシェ(写真 25)、飲めるさつまいも(写真 26)、焼きいもの 5 種類であり、いずれも約 2 時間で完売するなど高い評価を得た。販売の合間には、他の出店を見て回り、ちゃんちゃん焼きや冬瓜汁、梅干しなどの振る舞いを通して、地域の温かいもてなしに触れる機会もあった。活動の最後には体育館の片付けを手伝い、地域の方々と協力しながら第 2 回現地視察を終えた。

写真.19 体育館内の展示の様子



写真.20 消防車の車内見学の様子



写真.21 高校生がお菓子を販売する様子



写真.22 Imo Goro Daifuku の説明



写真.23 お菓子販売をするメンバー



写真.24 さつまいもと黒胡麻のマフィン



写真.25 藍フィナンシェ



写真.26 飲めるさつまいも



4.3.2. 文教福祉複合施設「モトガッコ」の訪問

1 日目の文化祭終了後、旧石川小学校をリノベーションした施設であるモトガッコを訪れた(写真 27)。2 階の展示スペースでは同行者である志賀一隆氏の写真展が開かれており、「日常の瞬間を映す、心の風景」をテーマにした写真を鑑賞した(写真 28、29)。その後、1 階のオープンスペースで全員が集まり、軽めのミーティングを行った(写真 30)。

写真.27 モトガッコ出入口



写真.28 志賀一隆氏の写真展



写真.29 写真展の様子



写真.30 ミーティングの様子



4.3.3. 一般社団法人「ひとくらす」でのお菓子作り・販売用 POP 作り、宿泊体験

ひとくらすでは、現地で生産・収穫されたさつまいも、藍を原材料としたお菓子を調理した(写真 31)。同時にお菓子販売に向けた POP 作成に取り組み、各自がデザインを工夫しながら作業を進めた(写真 32)。施設には薪ストーブ(写真 34)が設置されており、木材資源が豊富な地域ならではの暖房体験を味わうことができた。薪の燃える音や暖かさを身近に感じられ、地域の暮らしに根ざした設備として参加者にとって貴重な経験となった。

写真.31 お菓子作りの様子



写真.32 POP 作成の様子



写真.33 完成したお菓子を包装している様子



写真.34 薪ストーブ



4.4. 第3回現地活動(11月)

第3回の現地活動は、11月8日(土)・9日(日)に5名の学生で実施した。うち1名は、11月8日開催のキャンプフェスで販売する菓子の仕込みのために前乗りした。

第3回現地活動の行程表は図表3の通りである。前日入りして販売菓子の仕込み・梱包を行った後、11月8日は石川町キャンプフェスに参加し、6次化商品および中谷地区で収穫した野菜の販売を行った。最終日の11月9日は、中谷地区におけるこれまでの活動検証ワークショップおよび次期事業計画案に関する意見交換に参加し、所定の行程を完了した。

図表 3. 第 3 回現地活動の行程表

時程	行程
11 月 7 日(金)	三浦のみ 11/8 開催のキャンプフェスで販売する菓子の仕込みのため前乗り
8:05～ 8:56	東北新幹線 やまびこ 125 号(仙台行) 大宮発～郡山着 JR 水郡線(水戸行)
9:17～10:03	郡山発～磐城石川着
10:10～10:30	志賀さんの送迎で、ひとくらすに向かう。
10:30～	ひとくらすにて、キャンプフェスに向けての準備
12:00～13:00	ひとくらすにて昼食
13:30～18:00	キャンプフェスに向けての準備 宿泊先：堂平ガーデン矢内邸にチェックイン
11 月 8 日(土)	東北新幹線 やまびこ 125 号(仙台行) 大宮発～郡山着 JR 水郡線(水戸行)
9:17～10:03	郡山発～磐城石川着
10:10～10:30	志賀さんの送迎により、レークサイドセンター向かう。
11:00～	石川町キャンプフェスに参加 6 次化商品、中谷で収穫した野菜等販売
12:00～13:00	キャンプフェスで昼食
13:30～18:00	石川町キャンプフェスに参加
18:30	宿泊先：堂平ガーデン矢内邸チェックイン
11 月 9 日(日)	宿泊先(堂平ガーデン矢内邸)チェックアウト
9:00～	地元の皆さんによる送迎 a 朝食(中谷自治センター)
9:30～	
10:00～12:00	令和 6～7 年度の活動期間での中谷地区についての検証ワークショップを行う予定
12:00～13:00	中谷自治センターで昼食
13:00～14:00	令和 8～9 年度の実施期間の事業計画案についての意見交換
15:10～	磐城石川駅に向けて志賀の送迎により出発 JR 水郡線(郡山行)
15:37～16:26	磐城石川発～郡山着
	東北新幹線 やまびこ 216 号(東京行)
16:38～17:51	郡山発～大宮着

4.4.1. 母畑レークサイドキャンプフェス

11 月 8 日は、母畑レークサイドキャンプフェスにおいて、石川町中谷地区の農産物を活用した地域 PR 活動を実施した。具体的には、中谷地区産さつまいもの販売に加え、メンバーの三浦が開発・製作した加工商品 4 点を、地域住民および中谷自治センター関係者と協働で出店し、「中谷地区」として一体的な発信を行った(写真 35、36)。単なる物販にとどまらず、来場者との対話を重視した運営を意識し、ブース前での積極的な声かけや商品説明を通じて、地域資源の魅力を直接伝える機会を創出した。

写真.35 販売場所の様子



写真.36 実際の販売の様子



また、周知強化の取り組みとして、メンバーの三浦が制作のパンフレットを来場者へ配布し、中谷地区の認知向上と今後の関係人口創出を意図した情報発信を行った。配布時にはパンフレットの内容説明も併せて実施し、一過性の受け取りに終わらせず、地域への関心喚起につなげる導線づくりを試みた。

さらに、イベント運営の一環としてカレー提供スタッフへのケータリング支援も行い、出店者間の横断的な連携を図った。こうした実務的な協働や来場者・出店者との温かな交流を通じ、本活動の背景や目的について多くの人々と直接意見交換を行うことができた点は重要な成果である。特に地域関係者からは、今後の展開に向けた具体的な販売方法や関わり方に関する実践的な助言が得られ、活動の次段階を検討するうえで示唆に富む知見を蓄積する機会となった。

4.4.2. 年度検証・活動計画意見交換

中谷自治区センターで実施した2年目の年度検証ワークショップでは、以下の5つの内容について報告が行われた。

(1)活動実績の整理

2024(令和6)年度から2025(令和7)年度にかけての本事業は、調査段階から実践段階へと段階的に移行しながら展開された。2024(令和6)年度は主に地域理解と課題把握を目的とした調査期として位置づけ、計2回の訪問調査を実施した。調査では、地域住民、自治体関係者に加え、石川山葡萄愛好会、食彩あすか、ひとクラス、堂平ガーデン、自治協議会福祉部等の地域団体へのヒアリングを行い、多角的な視点から中谷地区の現状把握に努めた。

その結果、耕作放棄地の増加、担い手不足、高齢化の進行、若年層の地域参加率の低下といった構造的課題が改めて確認された。一方で、地域資源そのものの魅力や、住民の受容性の高さといったポテンシャルも明らかとなり、学生目線を活かした活性化アイデアの検討余地が大きいことが示唆された。これらの知見を踏まえ、学生側では個々の強みを活

かした活動案の素案作成を行った。

2025(令和7)年度は検証期から実践段階への移行を明確に意識し、計3回の現地活動を実施した。地域との共同ワーク、イベント出店、体験型プログラムの運営を通じ、実際の来場者反応や地域側の受け止めを検証した。具体的には、中谷文化祭において中谷産さつまいもおよび藍粉末を活用したスイーツ販売を行い、母畑レークサイドキャンプフェスでは地元食材を用いた商品販売と広報活動を展開した。広報面では、チラシ配布とフェイス・トゥ・フェイスでの説明を重視し、対面コミュニケーション中心の発信手法を採用した。また、交流促進の取り組みとして、野菜収穫会、ピザ作り体験、藍の苗植えなどの体験型プログラムを実施し、来訪者と地域住民、学生間の相互交流の機会を創出した。

(2)アンケートからみる中谷地区の評価

実施後参加学生向けアンケートの分析から、中谷地区に対する参加者の印象として最も多く挙げられたのは「人の温かさ」であった。地域住民が学生に対してフレンドリーかつ協力的である点は、多くの回答で共通しており、本地区の大きな強みとして位置づけられる。また、地域イベントへの参加率が高く、老若男女が関わる土壌が既に形成されていることも特徴として確認された。

資源面では、堂平ガーデンやひとクラスに代表される体験型施設の存在が、来訪者にとって魅力的な要素として認識されている。特に印象に残った体験として、野菜収穫会とピザづくり、文化祭での販売、受付での住民との会話、旧小学校を活用した宿泊体験、さつまいも掘りなどが挙げられ、「参加型」「体験型」コンテンツへの満足度の高さが明確に読み取れた。

今後の希望としては、フリーマーケットや蚤の市、芋煮会、森のコンサートといった交流イベントに加え、藍スイーツ、りんご・山ぶどうを活用した商品開発、東京でのポップアップ展開、日英パンフレット制作、郷土料理教室、SNS発信強化など、具体性の高い提案が多数得られた。これは、単なる体験参加にとどまらず、地域との継続的関与への潜在的ニーズが存在することを示している。

(3)成果と到達点

今年度の最大の成果は、地域との信頼関係構築が実質的に前進した点にある。活動参加者および地域関係者から「また一緒に取り組みたい」との声が複数得られたことは、外部主体としての受容段階を一定程度クリアしたことを示唆する。

また、イベントにおける販売活動と対面広報の組み合わせにより、地域資源の認知向上に具体的な手応えが得られた。特に体験型プログラムは来場者満足度が高く、参加者同士の自然な交流を誘発する効果が確認された。

学生側の観点では、企画提案から現場運営まで主体的に関与する経験を積んだことにより、コミュニケーション能力、イベント運営力、商品開発の基礎理解など、実務的スキル

の向上が見られた。加えて、地域課題を自分ごととして捉える意識変容が生まれた点も教育的成果として評価できる。

(4)課題と要因分析

一方で、いくつかの構造的課題も明らかとなった。第1に、活動運営が特定個人に依存する傾向が見られ、役割分担やナレッジ共有の仕組み、引継ぎ体制が十分に整備されていない点である。この状態が継続すると、活動の再現性および持続性にリスクが生じる可能性がある。

第2に、6次産業化の取り組みが試作・販売段階にとどまり、事業モデルとしての具体化には至っていない。これは、原価計算、販路設計、加工体制、資金計画などのビジネス設計面の経験不足が主因と考えられる。

第3に、広報活動の一貫性不足が挙げられる。対面広報は一定の成果を上げたものの、SNS運用は担当不在や投稿計画の未整備により停滞傾向にある。

第4に、若年層の継続参加率には改善余地があり、体験参加から継続関与へとつなぐ導線設計が今後の課題である。さらに、定量的評価指標(KPI)が未設定であったため、成果の可視化と改善サイクルの精緻化が十分に行えなかった。

(5)次年度に向けた方向性

以上の検証を踏まえ、次年度以降は①運営体制の仕組み化、②広報戦略の強化、③6次産業化モデルの具体化、④参加者育成導線の整備、⑤KPIに基づく評価管理、の五点を重点課題として段階的に実装していく必要がある。

特に中谷地区の強みとして明確になった「人の温かさ」と「体験資源の豊富さ」を軸に、体験→商品→外部発信→関係人口化という一連の流れを設計・検証していくことが、持続可能な地域連携モデル構築の鍵になると考えられる。

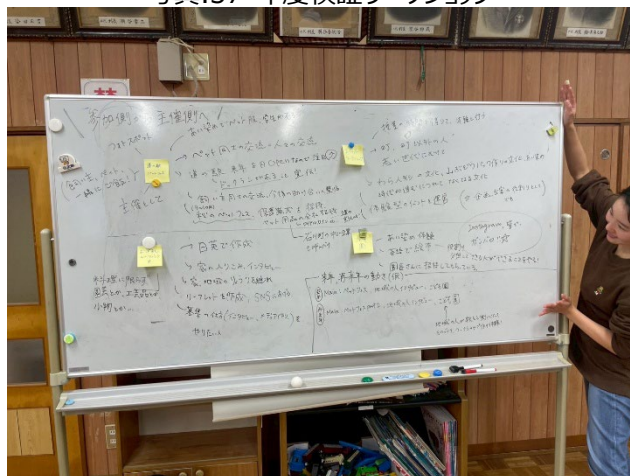
2024(令和6)・2025(令和7)年度の活動を通して、中谷地区は課題を抱える地域であると同時に、強い受容性と豊かな資源を併せ持つ地域であることが明確になった。人口減少や担い手不足といった構造的課題は依然として存在するが、地域住民の温かさや交流文化の土壌、体験型資源の充実度は、外部との協働によって新たな価値を生み出せる可能性を示している。

今年度は調査から実践へと段階的に移行し、販売活動や体験型プログラムを通じて、地域資源の発信と関係構築を実地で検証した。その結果、販売や対面広報による認知向上、体験型活動による参加者満足度の高さ、地域側からの前向きな提案の獲得など、一定の成果を得ることができた。一方で、運営体制の未整備や6次産業化モデルの具体化不足など、持続性を担保するための課題も浮き彫りとなった。

これらを踏まえ、次年度以降は「人の温かさ」と「体験資源」を核とし、組織的かつ継続的に実装していく仕組みづくりが重要である。中谷地区の強みを点で終わらせず、線と

して結び、面へと広げる段階に入ったといえる。

写真.37 年度検証ワークショップ



4.4.3. 藍焔視察

年度検証後に実施した藍焔の視察では、資料や数字では見えない「手間の重み」を体感することができた。藍は限られた場所で丁寧に育てられており、日々の管理や収穫、乾燥、粉末化に至るまで、多くの工程と時間が積み重ねられていることを知った。特に、鮮やかな色を安定して引き出すためには、発酵や加工の過程で繊細な調整が必要であり、単なる植物栽培ではなく高度な技術と経験が求められることが印象的であった。

藍には染色だけでなく、滅菌作用や食物繊維としての活用可能性があることも学び、その機能性の幅広さに驚かされた。伝統的資源でありながら、現代的な健康志向や商品開発とも接続し得る素材である点は、中谷地区における6次産業化の可能性を強く感じさせるものであった。

焔に咲く小さな赤い花も印象深い(写真38)。藍と聞くと青のイメージが先行するが、その足元に可憐な赤い花が咲いている光景は、自然の多層性を感じさせる象徴的な場面であった。

写真 38. 藍の花



写真 39. 藍粉末を活用した酒まんじゅう



視察後に実施された藍粉末を活用した酒まんじゅうなどの和菓子(写真 39)の試食会では、色味だけでなく風味にも特徴があり、地域資源としての実用性を具体的に実感する機会となった。単なる実験ではなく、「商品として成立するか」という視点で味わうことで、今後の商品開発や販売展開の可能性をより現実的に考えることができた。

藍は文化的価値を持つ素材であると同時に、地域の未来を支える可能性を秘めた資源でもある。今回の視察は、その可能性を机上ではなく現場で理解する貴重な機会となった。

4.5. 獨協大学環境週間 “Earth Week Dokkyo 2025～Winter～”における福島県復興支援物産展への参加

本活動は、獨協大学が実施する環境啓発イベント“Earth Week Dokkyo 2025～Winter～”の一企画として開催された福島県復興支援物産展への出店を通じて行ったものである。同イベントは、環境問題や地域社会への理解を深めることを目的に、学生・教職員・地域住民が参加する形で毎年企画されており、持続可能な社会の実現に向けた学内外への発信の場として位置づけられている。

本イベントは 2025 年 12 月 4 日に実施され、福島県産さつまいもの魅力発信および復興支援の一環として物産展への出店を行った。当日は、原料の特性を最大限に活かすことを目的に、「ガナッシュサンドクッキー」「さつまいもと黒胡麻のマフィン」「大学芋スコーン」「飲めるさつまいも HOT」の計 4 商品を企画・製造し、販売を実施した(写真 40)。各商品は、単なる加工品にとどまらず、さつまいもの甘味や香り、食感の違いを多角的に表現することを意識して設計したものである。

当日は冬季の屋外開催で気温も低く、来場者数や購買行動への影響も懸念されたが、試食や対面での説明を通じて商品の背景や地域との関わりを丁寧に伝えることに努めた(写真 41)。その結果、多くの来場者に関心を持っていただき、全商品を完売する成果を収めることができた。特に温かい飲料として提供した「飲めるさつまいも HOT」は寒冷環境下でのニーズと合致し、味わいだけでなくコンセプト面においても高い評価を得た。

写真 40. さつまいもを使って開発した商品



写真 41. 商品販売の様子



また、本出店は単なる販売機会にとどまらず、福島県産農産物の魅力や本活動の目的を直接発信できる貴重な広報の場となった。来場者との対話を通じて、地域資源の活用や商品展開に対する具体的な反応や意見を得ることができ、今後の商品改良や展開方法を検討するうえで有益な示唆を得た点も大きな成果である。

本取り組みは、生産(一次)・加工(二次)・販売(三次)を一体的に捉える第6次産業化の実践的な学習機会となり、地域資源をどのように価値へ転換し、消費者へ届けていくかという一連のプロセスを体感的に理解する契機となった。今後は、本イベントで得られた知見と来場者からの反応を踏まえ、商品のブラッシュアップ、ストーリー発信の強化、販路の多角化を進めることで、継続的な復興支援と地域価値の創出に寄与していきたい。

4.6. 「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会

本報告会は、コラッセふくしまのホールにて開催され、復興支援事業に取り組む複数の団体が一堂に会し、それぞれの活動成果を発表する場として実施された。本事業もその一団体として参加し、石川町中谷地区における地域資源活用や商品開発、イベント出店の取り組みについて報告を行った。

発表では、地域住民との協働過程や商品開発に至るまでの試行錯誤、販売実践を通して得られた成果と課題を共有した。特に、一次産業と加工・販売を結び付ける実践的取り組みや、対面での広報活動による関係人口創出の可能性について言及した。

また、報告会后に実施されたグループディスカッションでは、他団体の活動内容や運営上の課題、継続性への不安などについて率直な意見交換が行われた。各団体が直面している困難や葛藤を共有する中で、復興支援活動は決して順風満帆ではなく、試行錯誤の積み重ねであることを改めて実感した。一方で、共通する課題を認識し合えたことにより、より良い活動へ向けて改善を重ねていこうとする意識が高まり、大きな刺激と学びを得る機会となった。

本報告会への参加は、自団体の取り組みを客観的に見直す契機となるとともに、他団体との横のつながりを構築する重要な場となった。今後は、ここで得られた知見と交流を活かし、より実効性のある地域活性化事業へと発展させていく必要がある。

写真 42. 活動報告会



5. 石川町中谷地区の抱える問題と課題

5.1. 実態調査から得られた問題点

今年度の現地訪問、ヒアリング調査、イベント協働を通じて、中谷地区が抱える構造的課題は依然として継続していることが確認された。少子高齢化の進行に伴う担い手不足は深刻であり、畑作放棄地や空き家の増加といった物理的な問題に直結している。また、地域外との交流機会は徐々に生まれつつあるものの、継続的な関係人口の形成には至っていない現状がある。

特に印象的であったのは、地域内における意識の差である。自治協議会や各団体の代表者を中心に、地域の未来を見据えて積極的に行動する担い手が存在する一方で、日常生活の維持に精一杯で新規事業に踏み出す余裕がないと感じている住民も少なくない。活動の負担が一部の人材に集中している傾向は依然として課題であり、持続性の観点からも改善が求められる。

さらに、中谷地区には自然環境、農産物、伝統文化、人材といった多様な地域資源が存在しているが、それらが体系的に整理・発信されているとは言い難い。資源は「ある」が、価値として十分に外部へ伝わっていない状況が見受けられた。

加えて、若年層が地域活動に継続的に関与する仕組みが十分に整備されていない点も課題である。単発のイベント参加ではなく、関係性を積み重ねていく導線設計が求められている。

5.2. 取り組むべき課題

以上の問題点を踏まえ、今後取り組むべき課題は大きく3点に整理できる。第1に、担い手の可視化と負担分散の仕組みづくりである。活動が特定の個人に依存しない体制を構築し、地域内外の多様な主体が関われる形へと再設計する必要がある。

第2に、地域資源の価値化と発信強化である。一次産業・加工・販売を結びつける第6次産業化の視点を活かし、商品開発やイベントを通じて「体験」と「物語」を伴った発信を行うことが重要である。資源を単体で売るのではなく、背景や人の想いととも伝える構造が求められる。

第3に、若年層および外部人材との継続的関係構築である。単発参加型の取り組みから一歩進み、主催側へと関与を深める仕組みを設けることで、地域の将来を担う世代が主体的に関われる環境を整える必要がある。

今年度の実践を通じて、課題は単なる「不足」ではなく、「つなぎ方の問題」であることが見えてきた。資源、人材、想いは確かに存在している。今後はそれらを有機的に結びつけ、持続可能な循環構造を構築することが、地域活性化に向けた重要な鍵となる。

6. 次年度の活動計画案

2026(令和 8)年度の活動においては、これまでの「参加する側」から一歩進み、「主催する側」として地域に関わることを大きな目標とする。単発的な協力や体験参加にとどまらず、企画立案から運営、振り返りまでを主体的に担うことで、地域と大学が対等に協働する関係へと発展させたいと考えている。

活動は3つの軸を中心に展開する。第1は、フェス系イベントの企画・運営である。人々の交流を促進し、町全体を盛り上げる場を創出することを目的とする。2026(令和 8)年度には石川町に道の駅が開設予定であり、その活用可能性も視野に入れている。現在はペットフェスやカレーフェスといった案が挙げられているが、次年度は開催そのものよりも、実現可能性の検討や運営体制の整備、企画書作成など準備段階を中心に進める予定である。そして2027(令和 9)年度には、実際の開催および企画運営を担うことを目標とする。地域内外の人が集い、交流し、地域資源に触れる機会を創出することで、「中谷らしさ」を外へ発信できるイベントへと発展させたい。

第2は、地域のものづくりの担い手へのインタビュー活動である。次年度を通して継続的に実施し、郷土料理、園芸、工芸品、小物づくりなどに携わる町の方々を訪ね、聞き取りや体験を行う。実際に、藁人形づくりや山葡萄のバッグ制作、藍染めなど、地域には長年受け継がれてきた技術が存在している。しかし、その多くが時代の流れとともに継承の危機に直面している現状がある。こうした文化や技術を記録し、リーフレットの作成やSNSでの発信を通じて広く紹介することで、文化の保存と認知向上に貢献したいと考える。同時に、町の人々にとっても自身の技術や経験を外に伝える機会となるような取り組みを目指す。

第3は、こども園との連携である。石川町内のこども園から協力の申し出を受けており、地域と子どもをつなぐ取り組みとして実施を検討している。次年度は園への訪問やニーズの把握を行い、具体的な内容を協議する準備段階とする。2027(令和 9)年度には、インタビュー活動で協力を得た地域のものづくりの担い手を招き、園児を対象としたものづくりワークショップを開催したいと考えている。これにより、地域文化の次世代継承と世代間交流を同時に実現することを目指す。

以上の3つの軸を通して、地域の人々の温かさと資源の豊かさを活かしながら、交流の場を創出し、文化を可視化し、次世代へとつなぐ循環を構築していきたい。次年度は、その基盤を整え、実行へと移す転換期として位置づけられる。地域とともに成長する実践モデルの確立を目指し、主体的かつ継続的な活動を展開していく。

7. おわりに

本活動は、2024(令和 6)年度より、石川町中谷地区を対象に地域の実態調査から実証実験、そして検証へと段階的に取り組んできたものである。2024(令和 6)年度の調査期においては、地域住民や関係団体へのヒアリング、現地訪問を通じて、耕作放棄地の増加、担い手不足、

高齢化、若年層の地域離れといった構造的課題を把握した。同時に、中谷地区には自然環境、体験拠点、人材、食資源など、多様で魅力的な地域資源が存在することも確認された。

2025(令和 7)年度の検証・実践期では、文化祭や母畑レークサイドキャンプフェスへの出店、収穫体験やピザづくり体験などの交流型プログラムを実施し、地域資源の活用と対面型広報に重点を置いた活動を展開した。これらの取り組みを通じて、来場者および地域住民との直接的なコミュニケーションが生まれ、中谷地区の認知向上と関係人口の創出に一定の手応えを得ることができた。特に、地域の方々から今後の展開に関する具体的な提案や期待の声が寄せられたことは、信頼関係の深化を示す重要な成果である。

一方で、活動を進める中で、運営の個人依存、6次産業化モデルの具体化不足、広報運用の一貫性、若年層の継続参加の仕組み、成果指標(KPI)の未整備といった課題も明確になった。これらは今後の活動を持続可能なものへと発展させるうえで、優先的に改善すべき重要事項である。

以上を踏まえ、次年度においては、これまでの「参加型」の関わりから一歩進み、「主催・運営側」として主体的に地域に関与する段階へ移行することを目標とする。フェス型イベントの企画、地域の担い手への継続的インタビュー、こども園との連携による次世代への文化継承という3つの軸を中心に、地域資源の可視化と価値創出の循環モデルの構築を目指す。

中谷地区の最大の強みは、人の温かさと、暮らしの中に息づく実践知にある。本活動で得られた関係性と知見を基盤として、今後は点的な取り組みにとどまらず、地域内外をつなぐ持続可能な仕組みへと昇華させていく必要がある。小さな実践の積み重ねではあるが、その一步一步が地域の未来を形づくる基盤になると考える。

2024(令和 6)年度から始まった、中谷地区での大学生事業も、実証活動期間である2年目が終わり、いよいよ次年度より伴走支援事業として活動を行っていく。現在グループ内で出ている3つの案を軸にしながら、次年度はより中谷地区の活性化・地域振興につながるよう、大学生チームと地域が一体となって活動を行っていきたい。

謝辞

本活動は石川町役場の皆様ならびに中谷地区の住民の皆様の多大なるご理解とご協力のもとで実施することができております。今年度も、3回の現地調査の受け入れをはじめ、事前打ち合わせや活動報告会などで、中谷地区自治協議会長の遠藤和男氏、中谷自治センター事務局長兼中谷地区自治協議会事務長の志賀一隆氏をはじめとする、中谷地区の皆様、石川町企画商工課協働推進係の皆様には大変お世話になりました。現地活動の受け入れ、意見交換の機会の提供、地域資源に関する貴重な情報共有など、数多くのご厚意を賜りましたことに対しまして、ここに深く感謝申し上げます。

また、いつもご支援をいただいております、福島県企画調整部地域振興課の皆様にも心より感謝申し上げます。

